

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-01]

第24回オリンピック競技大会の名古屋招致における市民運動の展開（史,社）

*富田 幸祐¹ (1. 中京大学)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-02]

エコロジカル・アプローチに基づく体育授業の評価方法に関する研究（哲）

思想的基盤としてのメルロ＝ポンティの現象学的身体論から

*北川 修平¹ (1. 愛知教育大学)

16:10 ~ 16:30

[スポーツ文化-B-03]

スポーツ場面におけるライフスキル形成環境の可視化（心）

共起ネットワークによる関与人物の検討

*山田 弥生子¹ (1. 追手門学院大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:30 ~ 15:50

[スポーツ文化-B-01] 第24回オリンピック競技大会の名古屋招致における市民運動の展開 (史,社)

*富田 幸祐¹ (1. 中京大学)

本研究は、1988年第24回オリンピック競技大会の名古屋市による招致活動（以下、名古屋招致）に対する市民運動の展開について取り上げる。名古屋招致に関する研究では名古屋招致の敗因を問うことが主題となり、その中で名古屋招致に対する市民の反対運動の存在が言及されている。このように市民による運動は、名古屋招致の反対運動として評価されている一方で、名古屋市政に対する市民運動であるという側面については、十分に検討がされてきていない。

そこで本研究では、①当該期の名古屋市政と名古屋招致の関係を整理すること、②名古屋招致に対する市民運動を展開した複数の団体の論理と活動の分析を行うことで、名古屋招致をめぐる名古屋市政と市民運動の関係について明らかにする。

1977年8月に愛知県知事の仲谷義明がオリンピック招致構想を明らかにして以降、名古屋招致は中部圏の政財界によって検討が進められていく。こうした状況に市民の中には名古屋招致に関する検討が「市民の不在」のまま進んでいると訴えて、市民に対する情報公開や意思決定の参画を求める市民団体が登場する。いくつかの団体による活動は「名古屋オリンピックを考える市民連絡会議」の結成へとつながり、名古屋招致に対する市民運動の展開が本格化していくのである。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

15:50 ~ 16:10

[スポーツ文化-B-02] エコロジカル・アプローチに基づく体育授業の評価方法に関する研究 (哲)

思想的基盤としてのメルロ＝ポンティの現象学的身体論から

*北川 修平¹ (1. 愛知教育大学)

本研究は、エコロジカル・アプローチに基づき提示する体育授業における評価方法を、エコロジカル・アプローチの思想的基盤から考察することを試みるものである。エコロジカル・アプローチの観点から体育における〈できる〉を捉えると、それは身体と環境のマッチングとしてのケイパビリティである。そのため、学習者の〈できる〉は、学習者が環境に合わせて自らの身体能力を変えるだけでなく、環境を変えることによって開発することが可能であり、学習者が〈できる〉を生み出すために、自らの身体能力にマッチした環境をどのように改変するのかという、環境を変える創造性という評価基準を新たに提示することができる。本研究では、このような創造性をどのように評価することができるのかについて、エコロジカル・アプローチの思想的基盤として位置づけることができる、メルロ＝ポンティの現象学的身体論から考察を行った。メルロ＝ポンティによれば、行動はその構造に応じて「癒合的形態」「可換的形態」「象徴的形態」に分類でき、特に「象徴的形態」は人間に特有の行動の形態であり、同一の主題を様々な表現することができるパースペクティブの多様性を持つ。例えば体育の逆上がりでは、一見すると補助器具としての役割を持たない用具を補助器具として捉えたり、後ろ向きの回転という同一の主題を跳び箱の上やマットの上など様々な環境で表現したりできることが象徴的形態であると考えられる。体育の目的・目標は「ヒトの身体面からの人間化」であり、このことをメルロ＝ポンティの行動の形態を基に捉えるならば、それは行動の形態が象徴的形態へと移ったときであるといえる。そのため、体育授業における環境を改変する創造性は、環境の観点から見たときに身体能力をどのように機能させることができるのか、というパースペクティブを変えること・パースペクティブの多様性によって評価可能になると考えられる。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[1a1301-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表①

座長:周東 和好(上越教育大学)

16:10 ~ 16:30

**[スポーツ文化-B-03] スポーツ場面におけるライフスキル形成環境の可視化（心）
共起ネットワークによる関与人物の検討***山田 弥生子¹ (1. 追手門学院大学)

ライフスキル（LS）は「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」（WHO, 1997）である。スポーツを通じたLS形成では環境、とりわけ指導者の影響が大きいとされるが、LSは複合的概念であり、LS教育では重点スキルを絞った方が効果的と指摘されている。したがって、LSを構成する各要素ごとに形成へ寄与する人物を把握することが不可欠であるが、現状では十分に検討されていない。本研究は、LSの構成要素別に、その形成に寄与する人物を同定することを目的とした。関西のスポーツ系大学に在籍する学生アスリート180名（男性105名・女性75名、19.73 ± 0.54歳）を対象に、2020年10月に第1段階調査として大学生アスリート用ライフスキル評価尺度（島本ほか，2013）の回答を得た。続く2020年11月～2021年2月には第2段階調査として、同尺度が想定する10因子（ストレスマネジメント、目標設定、考える力、感謝する心、コミュニケーション、礼儀・マナー、最善の努力、責任ある行動、謙虚な心、体調管理）に関する具体的エピソードを自由記述形式で収集した。両調査はいずれもオンラインで実施した。得られたテキストをKH Coderで形態素解析し、出現回数20以上かつJaccard係数0.1以上を条件に因子別の共起ネットワーク分析を実施した。分析の結果、個人内スキル（目標設定、最善の努力、ストレスマネジメント、体調管理、考える力、謙虚な心）は「指導者」と強く共起し、対人スキル（コミュニケーション、礼儀・マナー、感謝する心、責任ある行動）は「チームメイト」「友人」「先輩」と結び付いた。以上より、スポーツを通じたLS教育では、個人内スキルには指導者による明示的指導を、対人スキルにはピア学習や集団活動の設計を重視することが効果的であることが示唆された。